

アクティブラーニングが大学生の留学動機に与える影響に関する予備的考察†

奥田 久春*

三重大学教養教育機構*

今日の大学教育にはアクティブラーニングの推進とグローバル人材の育成, 特に学生の海外留学が要請されているが, これらを有機的に連携させるために, アクティブラーニングによる学びをどのように海外留学に結びつけられるのかについて考察していく. その際に, アクティブラーニングで語られる「主体的な学び」とグローバル人材で語られる「主体性」とが結びつくと思われるが, いずれも共通するのは, 主体的とは能動的というだけでなく他者との関わりの中で「主体」が形成されていくものだということである. この「学び」に気づき, グローバル社会で更に主体性の形成に目を向けることができれば, 海外留学への動機づけになるのではないだろうか.

キーワード: アクティブラーニング, グローバル人材, 海外留学, 他者との関わり, 主体性

1. はじめに

大学教育は社会や産業界からの要請によって様々な影響を受けるものである. そうした昨今の特徴として大きく2つの方向性を挙げるとすれば, 一つはアクティブラーニングの推進であり, もう一つはグローバル人材の育成, 更に言えば海外留学の促進であろう. これらは全く別の課題でありながら, 議論されるようになってきた背景から求められる能力観が同じ方向を向いていると考えられる. そうであれば, 大学としてはそれぞれ別々に取り組むのではなく, 有機的な連携を模索していくことが可能なのではないだろうか. そしてアクティブラーニングが学生の海外留学の動機付けに繋がるのではないだろうか.

アクティブラーニングは学習の形態だが, それを通じてどのような「学び」がなされ, どのような能力を身につけることが期待されているのだろうか. そしてそうした「学び」によってグローバル人材のどのような「能力」として結実することが可能なのだろうか. 本稿ではこれらに共通する点を探り, どのように結びつけていくことが可能なのか考察していくものである.

そうすることで, グローバル人材の育成において課題となっている学生の内向き志向, 海外に行こうとしない学生をどのようにして海外に目を向けさせるかということ考察する道筋にしたい.

2. アクティブラーニングで期待されること

アクティブラーニングが政策として大きく取り上げられたのは, 2012年に中央教育審議会から『新たな未来を

築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へー(答申)』(以下, 『質的転換』)が出されたことによる.

このタイトルにある「主体的に考える力」について, 例えば本文で「知識基盤社会やグローバル化社会など予測困難な時代」において「答えのない問題に対して自ら解を見出していく主体的学修」と「自立した主体的思考力」と述べられているなど, 自ら(=能動的)という意味と自立した考えという二つの解釈ができる. これについては後述したい.

さて, この中でアクティブラーニングについて「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり, 学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称. 学修者が能動的に学修することによって, 認知的, 倫理的, 社会的能力, 教養, 知識, 経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ものだと説明している.

この認知的というのは「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し, 答えのない問題に解を見出していくための批判的, 合理的な思考力をはじめとする認知能力」のことであり, 「主体的に考える力」と同じと考えることができよう. また倫理的, 社会的能力とは「人間としての自らの責任を果たし, 他者に配慮しつつ協調性を発揮できるための」もの, また教養, 知識, 経験とは「想定外の困難に際して的確な判断力を発揮できるための」ものであると説明している.

アクティブラーニングを通じて育成されるこうした能力については, 同じく本文中に, グローバル人材の「土台」であると述べていることから, アクティブラーニン

グとグローバル人材とが結びついてくる。

3. グローバル人材に求められるもの

グローバル人材なる概念が出てきたのは、グローバル化への対応を迫られている産業界からの要請によるが、特に日本人の海外留学の減少から国際競争力の低下が危惧されたことが一つのきっかけになっている。

2010年4月に経済産業省に設けられた産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会から出された『報告書～産学官でグローバル人材の育成を～』の中でグローバル人材像について「グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考える」ことと「異文化理解・活用力」、「コミュニケーション力」によって「相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」と説明している。

更に2012年には、政府官邸が中心となり各省庁が参加したグローバル人材育成推進会議から『グローバル人材育成戦略』が出された。これによると、グローバル人材に必要な能力の要素として次の3点が挙げられている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、
協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

語学力やコミュニケーション能力以外に、主体性や協調性・柔軟性、責任感・使命感が取り上げられている点はアクティブラーニングやその中の「主体的に考える力」に通じるものである。また、グローバル人材の育成及び活用に向けた文部科学省の取り組みとして「学生の主体的な学びを確立するため、(中略)学士課程教育の質的転換」が挙げられているので、ここでも『質的転換』に述べられていた「主体的に考える力」に通じるものと理解していいであろう。

なお、これら「主体的に考えること」や「主体性」とは同じく経済産業省が提示した社会人基礎力に挙げられているものに依拠しているだけで、独自の説明があるわけではない。

高度経済成長期においては個人よりも集団の利益が優先されてきたことや、そもそも日本では社会と個人との線引きは曖昧であり、近代市民としての「個人」を学校教育で育成してきた訳ではない。そうした社会では、共有されるべき既存の知識を受動的に学べば充分だったかもしれない。取って他者と関わって知識を構成する必要はなく、学びの主体になる必要も主体性を顧みる必要もなかった。

しかし経済発展の停滞とグローバル化の中で日本が経験する脱近代の状況とは、再帰的であれ先行き不透明な時代であることは間違いない。高度な知識基盤社会にあつては既存の知識では対応できず、また知識の大衆化が進む一方で、価値の多元化が起こり、情報過多の中、共有されるべき知識の枠組みも明瞭ではなくなっている。社会は既存の知識の所有だけで個人を価値づけて保障してくれるわけではなくなってきた。社会に依存し追従すればいいという時代ではない。

つまり、こうした状況において個人の人々の主体性が必要とされてきたと考えられる。

4. アクティブラーニングによる学び

このようにアクティブラーニングとグローバル人材との政策的な結びつきは理解できるが、ではどのような「学び」が必要となってくるのだろうか。

アクティブラーニングを推進する溝上(2014)は、アクティブラーニングを「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。ここで溝上が認知プロセスの外化と述べている点に着目する必要がある。

というのも、溝上(2014)によれば、アクティブラーニングが登場してきた背景として、知識基盤社会と呼ばれる今日の社会において求められる能力が変わってきたことに言及しているからである。

この能力について、溝上は情報の知識化、知識の活用、知識の共有化・社会化、知識の組織化・マネジメントといった情報・知識リテラシーだと説明している。

このため、アクティブラーニングでは個人的に習得した知識=能力ではないという学習観が必要となってくる。つまり学習する中で自らの知識として構成し、必要な場面で活用するとともに、発表などを通じて意見を表明し議論を行うことで、他者とも知識の擦り合わせを行い、またそうして知識を共有する集団と知識を系統立てて整理することが学びとして必要となると考えられる。

アクティブラーニングは学生が能動的であることが前提だが、能動的な学習というだけでは、知識伝達型講義であっても能動的に傾聴したり、ノートにメモしたりして理解していくことも可能である。しかしそれは知識の活用、共有、社会化や組織化には至らない。他者に関わる協働的な知の形成が必要なのである。

そうした知を形成するために、アクティブラーニングでは、協働学習、PBL(プロジェクトベースドラーニング、又はプロブレムベースドラーニング)といった学生

に活動をさせながら進める教授法が取り入れられる。溝上がその定義の中に「書く・話す・発表するなどの活動への関与」と述べたのは、これらの教授法が含まれていることを示唆している。

しかしこれら協働学習やPBLであっても、学習が形骸化してしまう恐れもある。表面上の知識でグループ討議をしたり、簡単な調べ学習に終始したりして、単に他者と言葉を交わすだけの学習に陥りがちなこともありうる。こうした形式的な学習にならないためにも、学習成果を意識する必要がある。

PBL教育によって得られる成果として、デラウェア大学でPBLを推進してきたBarbara (2001)らは次の6点を挙げている。

- ・批判的思考や問題分析・解決能力
- ・学習資源を見つけ、評価し、活用する力
- ・チームや小グループで協働する力
- ・柔軟で効果的なコミュニケーション力
- ・知識内容・知的技能の活用力

これらは先述した溝上による情報・知識リテラシーや『質的転換』での汎用的能力、グローバル人材に求められる能力に近いものといえることができるが、こうした能力の育成を念頭にした学びを授業の中に織り込んでいくことが求められる。

例えば、自ら置かれている現状や課題に対して、批判的に捉え問題分析を行い解決していくこと、そのために必要な知識にアクセスし、またその知識に対しても批判的に評価しつつ活用していくこと、それらは一人で行うのではなく、他者とコミュニケーションを図り、協働していくという授業が考えられる。

さて、ここまで来て、依然一つの疑問が残っている。「主体的」の解釈において「主体性」と他者との関わりについてである。即ち能動的に他者に関わる学びが主体的なのか、他者に関わることで形成されるものが主体性なのだろうか。アクティブラーニングによって身につける汎用的な能力は、能動的＝主体的に他者に関わる学びによって育成されるものなのか、こうした汎用的能力こそが主体的なもの＝主体性なのだろうか。

5. 学びにおける主体性

ポスト構造主義によれば、社会構造から主体を切り離して考えることはできないとされる。主体は所与のものであって、超越的な自我として原初的に存在するものではない。そうした意味では、学びもまた所与のものである。こう述べると受動的な学びのように感じられるが、あらゆる学びは社会と無関係に成り立つわけではない。学び

は他者との関わりの中でなされていくものであり、その中で主体性が形成されるのである。

しかしこの主体は、他者に依存したり社会に追従したりするものではない。逆に自立したものである。廣瀬(2013)はグローバル人材と主体性との関係について論じる中で、主体性にautonomyの英訳を当て「自らの意思に基づいて、自由に選択・判断・行為する態度、生き方」と説明している。またそうした主体的な人間の特徴について、戦後間もない丸山真男等による主体性論争に依拠して、受動的でない非決定論的な価値判断をする態度や習慣を主体性エートスとして論じている。丸山のいう主体性には他者感覚が求められるともいわれているように、「自らの意思」といっても自己を絶対視することではない。自己を相対化することが求められるのである。

繰り返すことになるが、個人を社会から切り離して考える主体性ではなく、他者との関わりの中で能力を構成していくのであり、そうした能力が主体性となって形成されていくものなのだ。

グローバル人材といったとき、それはグローバル化によって逆説的に顕在化してきた多様な社会の中で、他者なるもの、異質なるものとの関わりを強く意識せざるを得ないという状況で、異質なる他者と関わることで形成される自己＝主体性なのである。こうした主体性を学びの中で育成していくことが求められているのではないだろうか。

6. 海外留学と主体性

海外留学から帰国した学生の報告会に参加すると、その意欲的な語りにも感銘を受けることが多い。学生の生き生きとした表情から自分の意志に対する自信が満ち溢れていて、主体的な存在感を感じざるを得ない。

学生は内向き志向と揶揄されてはいるが、実際に学生と語ると海外留学に興味あるという声も多い。それでも留学に躊躇してしまうのが現状である。留学は、一昔前に比べれば身近なものになってきたものの、まだまだ即座に実行できるものではない。留学に係る莫大な経費、異文化での生活など、それなりの覚悟と準備が必要となる。例えば太田(2014)によると留学の阻害要因として、就職活動の早期化と長期化、単位互換制度の未整備と学事暦の違い、大学での国際教育交流プログラム開発の遅れ、短期的なキャリア形成志向、英語圏の大学の授業料の高騰、経済の停滞と家計の悪化、海外留学を評価しない雇用、要求される語学力の高度化、少ない海外留学のための奨学金、リスク回避と安全志向などを挙げている。

それらハードルを超えてでも留学を志すということは、大学が提供する課程に満足せず、自ら学びを切り開いて

いこうという意思がなければ実現は難しい。

海外留学も余程お膳立てされた研修プログラムだと別だが、学生は自分で周りの者に尋ね求めるなど情報を収集し、思考し、判断していかなければならない。そこでは能動的で積極的な意欲や能力が必要とされる。

しかし主体性とはそうしたことだけではない。留学した学生からは、留学中は積極的にならざるを得なかったという苦労話とともに、現地の人々や様々な国や地域から学びにきている多様な学友たちとともに生活を過ごす中で、視野が広がったという経験談をよく耳にする。そしてそうした日常の多様性の中で自己認識や自己主張ができるようになったという話もよく聞く。

知識基盤社会、情報化社会においては、留学してまで先端的な知識を学ぶ必要性は低くなっている。知識を得るのであれば国内にいてインターネットや書籍で学ぶことも可能である。しかし海外の異質な文化の中に留学し、経験したことをこれまで日本で学んだ内容と重ね合わせたり比較したりして自らの能力として再構成し、更に留学先で学ぶ異質な者同士が多様な意見をぶつけあい批判的に考察することで、グローバルな主体性が形成されていくのではないだろうか。

7. おわりに

アクティブラーニングは、能動的な学習の形態であるとともに、他者の影響を受けたり他者に影響を与えたりする中で知識を構成し、自己(=主体性)を形成していく学びだと考えられる。グローバル人材として語られる主体性もそうした学びの中で育成されるものと理解できよう。学生はアクティブラーニングによって他者と関わりながら学ぶということを学び、その中で主体性が形成されるということに気づくことが必要ではないだろうか。無論、国内にもいる外国人と関わることもできる。しかし異質な環境で主体性を形成するには海外留学が絶好の機会といえるだろう。学生はそうした主体性の意義を理解することで、留学への動機付けになるのではないだろうか。主体性については様々な議論があり、更に考察を進めなければならない。本稿をもとに実証していくことが今後の課題である。

参考文献

- 宇野重規 (2003) 「丸山眞男における三つの主体像」小林正弥編『丸山眞男論—主体的作為、ファシズム、市民社会—』東京大学出版会。
- 太田浩 (2014) 「日本人学生の内向き志向に関する一考察—既存のデータによる国際志向性再考—」『ウェブマガ

ジン「留学交流」2014年7月号 Vol.40, pp.1-19.(http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afiedfile/2015/11/18/201407otahiroshi.pdf) (2016年10月20日)。

廣瀬武志 (2013) 「グローバル人材と海外留学をつなぐもの：〈主体性〉再考」『ウェブマガジン「留学交流」』2013年5月号 Vol.26, pp.1-18.

(http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2013/_icsFiles/afiedfile/2015/11/19/201305_hirosetakeshi.pdf) (2016年10月20日)。

松下佳代 (2011) 「『主体的な学び』の原点—学習論の視座から」杉谷祐美子編著『大学の学び 教育内容と方法』玉川大学出版部。

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。

横田雅弘・小林明編 (2013) 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社。

グローバル人材育成推進会議 (2012) 『グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議審議まとめ)』 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>) (2016年11月10日)。

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 (2010) 『報告書～産学官でグローバル人材の育成を』 (<http://www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf>) (2016年11月15日)。

中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ— (答申)』

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2016年11月10日)。

Barbara J Duch et al. (2001). *THE POWER OF PROBLEM-BASED LEARNING A Practical "How To" for Teaching Undergraduate Courses in Any Discipline*, Stylus Publishing. ダッチ・B・Jほか(三重大学高等教育創造開発センター訳) (2016) 『学生が変わるプロブレム・ベースド・ラーニング実践法 学びを深めるアクティブ・ラーニングがキャンパスを変える』ナカニシヤ出版。

†Hisaharu Okuda * : A preliminary study how the active learning influences students' motivation for study abroad.
* College of Liberal Arts and Sciences, Mie University.